

保育実践のパイオニア

うじはらちよつ
氏原 鋳 (2)

守 隨 香

模範幼稚園で氏原が実践した保育の内容と目的は、東京女子師範学校附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）とほぼ同じだった。教材や研究方法も、保育見習いで学んだことを生かしている。だが、附属幼稚園とは地域も事情も異なる幼稚園だし、立場も見習い生と保母では違うのだから、苦心もまた別なものがあったはずだ。

第一に、次頁の表に示したとおり、氏原一人が担

当した幼児数が違う。模範幼稚園が開園してまもない頃は見習い生時代に比べて少ない幼児数であったから、附属幼稚園で学んだことを実践で再検討し吟味して、自らの実践を築いていく余裕があっただろう。けれども一八八一年（明治十四年）になると入園者が増えたため、他に例をみないほど多くの幼児を受けもつことになった。開園以来積み重ねてきた実践を、もう一度検討し直す必要に迫られることも

| | | |
|---------------------|-------|--------------|
| 保育見習い生時代 (附属幼稚園) | | 40.3人以下 ① |
| 模範 幼稚園 | 明治12年 | 24.0人 ② |
| | 14年 | 57.5人 ③ |

▲氏原の担当した幼児数の変遷

あっただろう。

第二に、かよっている幼児の家庭環境が違ふ。附属幼稚園ははからずも、富裕家庭の子弟が集まる貴

族的な幼稚園となっていた。新規の事業や精神を開拓した場合、いち早く取り入れる（または取り入れることができる）のは、経済的・文化的に上層の者であることが多いものだ。その点模範幼稚園は、保育料を無料にしたために、より早く一般庶民に受け入れられ、たくさん庶民家庭が、我が子を幼稚園に入れることができるようになった。開園した一八七九年（明治十二年）に四十八名であった幼児が、二年後には百十五名にまで増えたのもそのためだろう。財政の苦しかった大阪府で、保育料をとらない方針を強行したところに、氏原の考えの一つをうかがい知ることができる。幼稚園が、上流階級のための贅沢な教育機関だと思われ、庶民の生活から離れてしまうことに抵抗を感じたのだろう。より広い普及と発展をねがうなら、保育料が負担にならないという条件こそ、具体的かつ庶民に最も強く訴える方法だからである。だとすればそれは、附属幼稚園のあり方に対する問題意識を表しているともいえる。

保育内容は、午前中は主に恩物を使った課業で、午後は自由あそびというのが日課であった。時間割をみると、恩物の名称に附属幼稚園とは一部違う書き方がされてある。附属幼稚園では「織紙」と「畳紙」が別々の子目となっているが、模範幼稚園ではこの二子目を合わせて「織紙畳紙」とし、「剪纸」と「木箸細工」も同様に「剪纸木箸細工」として扱っている。類似の子目をまとめたのだ。^④ 附属幼稚園の保育をただ盲目的に再現するのではなく、自分なりの考えで工夫をし、実践しているのがわかる。

模範幼稚園は、保育実践の点では全く順調だったのに、大阪府の財政難が原因で廃園されることになってしまった。渡辺昇が知事職をおりたことで、幼稚園の理解者を欠いた結果でもあった。しかし、幼児の父母の中から七名の資産家が、幼稚園を続けるための出資を申し出てくれたおかげで、私立中洲幼稚園として九死に一生を得たのである。氏原は模範幼稚園が廃園した原因を真摯に受けとめ、保育上

の研究・改良だけでなく、経営上の方策にも心をくだいての再スタートとなった。一人二十五銭ずつ保育料をとり、小使を雇うのもやめて事務・雑務までを保母がやることにしたのだ。教材も、金銭をかけないよう、自然物を利用したあそびを考え出していった。^⑤

一八八四年（明治十七年）、中洲幼稚園はわずか六か月で廃園した。廃園といっても、大阪市北区が譲り受けて公立北区幼稚園にかわったのだ。氏原は、唱歌教材として小学唱歌集を取り入れ、西洋風の曲と現代語による歌詞の唱歌で保育している。楽譜を読むのにかなりの訓練がいったはずだ。またこの時期は、幼稚園増加に伴って保母の需要も増したため、保母養成が急務とされていた。そこで北区幼稚園でも保母見習い生をおいて、積極的に保母を養成している。我が国最初の保母養成教育を受けた氏原は、この時既に、大阪の幼稚園発展に欠くことのできない人物となっていたことがわかる。

北区幼稚園が開園して九年がたった一八九一年二月、翌月までで廃園することを北区会が決定した。一年ほど前から、保母養成の必要性が認められなくなってきた、廃園の予告はされていたものの、氏原には無念なことだった。幼稚園の必要性ではなく、保母養成の必要性がなくなったことが原因で北区幼稚園が廃園になるということは、北区幼稚園が、よほど保母養成教育に力を入れ、社会的にも保母養成の現場という認識が強かったと思われる。この時氏は、幼稚園を続けられるように取りはかってもらおうと町会議員の家を一軒一軒回っている。品格を守って育った氏原が、これほど低姿勢で人に請願するのは初めてだった。家庭教育で培われた強靱な忍耐力と教職の誇りが、氏原の志を支えたに違いない。氏原の努力は実を結び、公立西天満幼稚園が開設された。

北区幼稚園時代に氏原は、『京阪神連合保育会雑誌』にたびたび投稿した。その中には、既作の唱歌

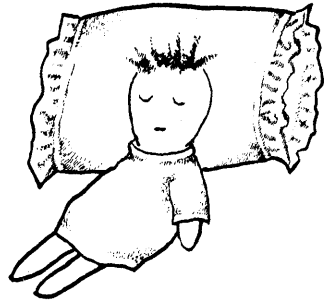
が幼児の保育にふさわしくなければ、保母が改作して用いるよう、呼びかけているものもある。また、改良作品を誌上公開することで、一保母の試みから多くの保母が学び合うようにすべきだと書いたものもある。^⑦そして氏原が実際に、既作の譜をもとに作詞した歌詞を発表しているのだ。創造的な保育を自ら実践し、より多くの保母たちに研究の模範を示す氏原の向上心と使命感が伝わってくる。この西天満幼稚園に勤務した九年間を最後に、氏原は保母の地位を退いた。

一九〇二年から一九〇九年まで氏原は、大阪府女子師範学校に勤めた。教員心得としてフレールベルの保育理論を講義する一方、同校附属幼稚園の上席保母をも兼任した。^⑧氏原は以前、幼稚園で必ず見習い保母をおいた。多くの保母を養成して、大阪の幼稚園発展に内側から寄与してきた。けれど見習いは、制度として定着していなかったため持続しないことが多かったという。見習い生自身が見習いを続ける

意志をもちにくかったのか、あるいは養成する幼稚園側になにか問題があったのかはわからない。また本来幼稚園は、幼児の保育を意図するところであるから、保母養成教育の場としては十分な設備環境でなかったはずだ。その点、大阪女子師範学校は教員養成校だから、氏原の保母養成力を十分に発揮することができたと思われる。

以上が、帰阪した氏原が保母として、また教員として歴任した幼稚園および学校での教職生活である。

ところで大阪市は一八九七年に大阪市保育会をつくり、保育法の研究・改良をしてきた。後の京阪神三市連合保育会の母体である。研究を活発に交換し合って、関西地方に幼稚園の文化を築いたといえる。氏原は北区代表の委員や『京阪神三市連合保育会雑誌』の編集・発行といった形で会に貢献した。一九〇二年四月に開かれた大阪市保育会総集会において、氏原は保母の服装取調委員の委員長に選ば



れ、^⑨その調査結果を同年十一月に発表している。^⑩それによると、氏原ら取調委員の出した保母にふさわしい服装は、袴と筒袖ということらしい。どちらも動きやすさと経済性を重視した結果である。ただし

筒袖の方は、着る人によって下品にもなるけれど、それも、見慣れば少しずつ良くなっていくだろうと述べている。経済的で華美にならない服装に保姆の品格を求め、袴と筒袖がそれを象徴していると考えたようだ。

同じく一九〇二年五月に行われた連合保育会では、氏原が長年の保育経験から「幼児の好む恩物」^①について考えを述べている。記録によると氏原は、恩物の中で幼児が最も好むのは板排いたばらべだといっている。なぜなら、板排べは積木のように崩れることなく、どの年齢の幼児にも適するからだという。二十余年にわたる保育経験から、氏原はここに一つの結論を見出しているのが興味深い。

では、氏原が完全に退職した一九一〇年（明治四十三年）以降の研究活動をみてみよう。退職したからといって、氏原の保育への情熱が冷めることはなかった。研究に励んで、現役の保姆たちの先達であり続けた。退職後の研究活動は、各種の保育大会へ

の出席をはじめ、講習会への参加およびそこでの演説、全国各地の幼稚園を見学して誌上に紹介するなど、多岐にわたっている。そうした経験から、氏原は保育についての知識と見聞を広げ、造詣を深めていったのだ。そしてその成果は、間接的に、若い保姆たちの成長に役だっていた。氏原は現職時代から保姆養成教育には意欲的だったから、後輩の養成と成長のために研究活動を続けたのかもしれない。しかし高齢に達しても常に保育研究を続けたことは、氏原自身が保育者として成長し続けた証といえるのではないだろうか。

退職後も氏原が、絶えず保育者としての自己成長を心がけ、厳しく自分に修養を課したことがわかるエピソードを紹介したい。一九三四年（昭和九年）七月、東京女子師範学校での夏期講習会に参加したときのことだ。講師の倉橋惣三が「保育項目の実際」という講演をした。それをきいて氏原は、自己の実践をふり返り、まちがっていたことに気づいた

のである。倉橋の講演内容は、保育項目に談話がどう位置づき保育に機能しているかよりも、保姆が談話活動をどうとらえ、実践に位置づけていくのか、というものだった。子どもの生活から生じる談話を保姆が心境に即して受けとめ、応答すること。いつでもそれができるように、手持ちの話を多数用意すること。話すだけでなく、聞く仕方も子どもの心境を理解して聞くことなど。この時氏原は、西天満幼稚園でかつて見習いをした宮崎しかに手紙を書き送った。まず倉橋の講演内容を記し、その上で、当時氏原が教えた談話の解釈や技術にまちがいがあったことを認め、わびている。^⑫西天満幼稚園時代の氏原は、軍事国家に有用な人材を育てたいと考えていたから、談話といえば修身話を中心だったはずだ。そのような談話活動を実践し、見習い生にも説いてきたことを氏原は反省し、その心境を教え子に告白している。教え子の前で自分の誤りを認め、謙虚にわびて訂正する氏原の態度に、教育者としてあくま

でも真実を追求し、常に前進を心がける姿勢をみることができる。

一九三八年（昭和十三年）七月、氏原銀は熱海市西山の閑静な住まいで八十年の生涯を閉じた。最晩年になってさらに、童話の創作を手がけている。絶筆となったのも「摘草と子供」という童話だった。

氏原のかいた童話は雑誌『幼児の教育』に収められているが、どれも勸善懲惡・善行報酬といった、明治・昭和初期の価値観を色濃く反映している。登場する子どもはみな、明るく元気で心根の優しくたくましい子どもに描かれている。おそらく、氏原の追求した理想の子ども像でもあっただろう。

氏原銀は、我が国で初めて幼稚園の保育者養成を目的とする教育を受け、保育者として生涯をまっとうした女性である。先例のない新しい試みの連続で、幼児保育の実践をその手で築きあげた功績はまさに「バイオニア」の名にふさわしい。その積み上げた実績の事実が全て、現在の保育に生きているわ

けではない。けれども主体的に保育を創造する力量と、自分に研鑽を要求する姿勢は、保育者の成長の要として大いに学ぶべきところである。

最後に、氏原が一九三四年に自宅で詠んだ短歌を記す。

「述懐」

山阪を覚束なくも迎りけり

高嶺にすめる月を見るまで^⑬

——終——

(お茶の水女子大学大学院)

〈参考文献〉

- ① 文部省『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版 一九六九 P. 580
- ② 倉橋惣三・新庄よしこ 復刻版『日本幼稚園史』臨川書店 一九八三 P. 139
- ③ 東京都立大学『人文学報』No. 47 一九六五 P. 81

- ④ 岡田正章他編『保育に生きた人々』風媒社 一九七一 P. 60

- ⑤ 復刻『幼児の教育』第26巻 7・8月号 P. 95

- ⑥ 竹村一『幼稚園教育と健康教育』ひかりのくに昭和出版 一九六〇 P. 166

- ⑦ 京阪神連合保育会雑誌Ⅰ第6号 一九〇一 P. 45

- ⑧ 京阪神連合保育会雑誌Ⅲ第21号 一九〇八 P. 59、

61

- ⑨ 京阪神連合保育会雑誌Ⅰ第8号 一九〇二 P. 55

- ⑩ 同右 第9号 一九〇三 P. 36

- ⑪ 同右 第8号 一九〇二 P. 39

- ⑫ 復刻『幼児の教育』第38巻 8・9月号 P. 32

- ⑬ ⑥に同じ P. 170